

---

**第II期事業年度 事業報告書**

**(自 平成 24 年 6 月 1 日 至 平成 25 年 5 月 31 日)**

---

## 目次

<b>I 第II期事業年度事業の報告</b>	<b>…2</b>
<b>II 第III期事業年度事業について</b>	<b>…7</b>

# I 第II期事業年度事業の報告

平成 25 年 8 月 17 日 事務局

## 1. 団体の概要

### (1) 法人の目的

東北太平洋沖地震により、激甚な被害を受けた岩手県大槌町において、町民や専門家の幅広い知恵と行動力を結集し、まちづくりに関する事業を行い、観光業、商工業、農水産業の発展と、それらの担い手である大槌町民の生活再建に寄与すること

### (2) 事業内容

[法人定款より]

- ① 住民参加型復興まちづくりに関する、調査研究やその補助事業
- ② 効率的なまちづくりの運営に資するための委託事業
- ③ 津波被害前後の大槌の歴史や資源、景観等に関する情報の収集・蓄積及び展示、インタープリテーションを含めたタウンミュージアム事業
- ④ 災害ボランティアや視察研修等の誘致と、そのアメニティ向上
- ⑤ 大槌町民と国民、行政およびその外郭団体等とのネットワークの促進
- ⑥ ご当地グルメや観光資源の発掘・開発、イベントの実施など、地域振興に資する事業
- ⑦ 飲食（ご当地グルメ）の提供
- ⑧ 前各号に掲げる事業に附帯又は関連する事業

## 2. 第Ⅱ期事業年度の取り組みについて

### (1) 取り組みの概況

平成 24 年度「大槌町 生涯現役雇用創出事業」等の委託事業の受託、各種民間助成等を請け、事業を展開してきました。

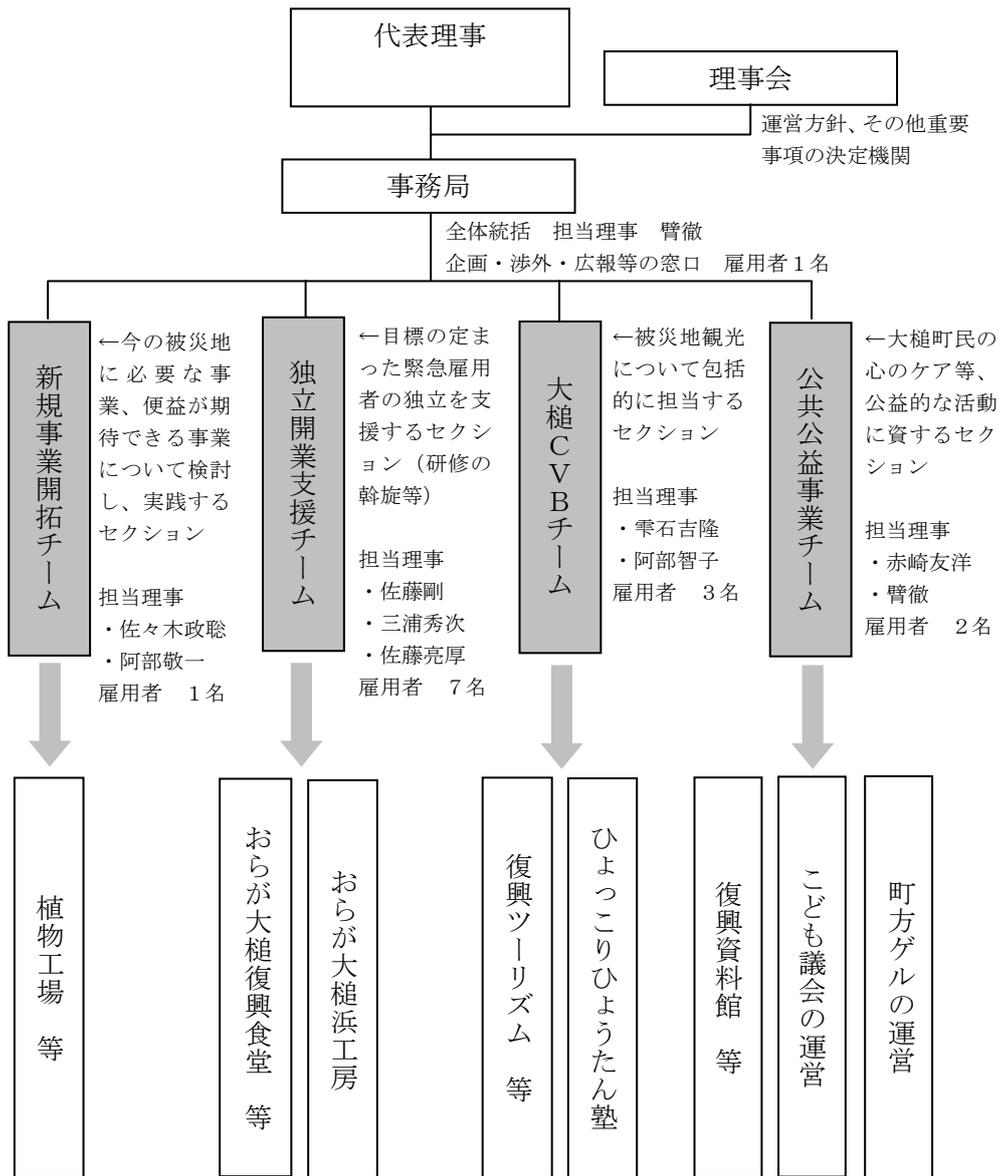
表 1 収支の総括表

収入総額	112,085,968 円
(前年からの繰越額)	-120.363 円
(本年の収入額)	112,206,331 円
支出総額	110,251,768 円
翌年への繰越額	1,834,200 円

## (2) 具体的な取り組みの報告

今年度は、昨年度の取り組み内容と事業成果及び当法人の事業内容を踏まえ、被災者の今の立場と、将来の目標の種類や深度に応じ、①公共公益的な事業、②観光振興に資する事業、③独立支援事業、④新規事業開拓という4つの事業方針に則し、以下のようなチーム制を導入し、本事業を展開してきました。

### 【事業執行体制】



※CVBは観光コンベンションビューロの略

## ①公共公益事業チーム

全町民向けに様々な情報を伝える「大槌新聞」の発行、復興の変遷などを記録・展示する復興館を運営する他、海外の財団である「Give to Asia」の助成を受け高齢者を中心とした町民が、フラワーアレンジメントやそば打ちなどを楽しみながら生計向上を目指すコミュニティサロン「町方ドーム」の運営などを手がけました。

特に、大槌新聞は町外にも定期購読者を確保しており、地域新聞としての可能性を大きく感じさせる存在です。今事業期間中にマネタイズをおこなう方向で調整しています。

## ②大槌観光コンベンションビューロチーム

東日本大震災後、被災地視察、企業研修、教育型ツアーなどで、国内外を問わず多くの方が大槌町を訪れるようになりました。

- 現地活動をして支援をしたい。
- 都市部から継続的にできる支援方法を探している。
- 企業の CSR としての東北支援の在り方を見つきたい。
- 持っている都会のリソースを現地のニーズに繋げたい。



など、来られる方々の思いは様々です。

目的をもって大槌町に来られる方々には、その思いや問いかけ、ニーズに合った現地受け入れプログラムをご提案しています。受け入れをする大槌町民自身が、様々な人と触れ合う事で刺激を受け、成長していく過程も考慮に入れたコンテンツを考えています。

### <新人研修・企業研修>



現地の人々とふれあい、個人と社会の関わり方、働く事の意味を考え、仲間との共同作業を通してチームワーク力を磨きます。



- 町民ニーズヒアリング
- 町民との交流
- 町内ボランティア活動
- ワークショップ

### <リーダーシップ研修>



町の将来、住む所、子供の教育。全てにおいて先行き不透明な状況の中、どのように「人間」「父親」「母親」、そして「町民」として覚悟を決めていったのか、住民の方々の話を聞き、新たな挑戦へ挑む勇気をもたらしてください。



- 被災時に町民のリーダー的役割を果たした方のお話
- 被災後、「覚悟」を決め事業を始めた方との交流
- 新規事業の立ち上げ現場視察
- 町民をまじえたワークショップ



さらに、震災を経験したからこそ見えて来た、リーダーに必要な「覚悟」「プライド」「行動力」「人間愛」といった素質や思いの必要性を、町民との会話や視察を通して感じとります。

### <教育型ツアー>



学生やユース世代に、「何があっても生きのびる」事や、未来に対する不安を感じる時でも「覚悟」を決めて前へ進む事の大切さを伝えます。その他、震災ナレッジの継承として、防災、避難、避難所運営等の観点からの学びも取り込みます。



- 町内語り部ガイド
- 被災当時の話
- 避難所生活と若者が果たした役割について
- 復興と社会的事業の関わり方についての視察
- ワークショップ

### <被災地視察>



肩肘をはらず、まずは現地に来て下さい。「被災地で何をしたいのかわからない。」そんな本音を語って頂き、まずは町民の方々と触れ合い、現地の情報収集をしながら、各々のスタイルにあった被災地との関わり方を探っていきます。



- 町内語り部ガイド
- 町民との交流
- 町内ボランティア活動
- ワークショップ

### ③独立開業支援チーム

平成 25 年 12 月には木村省太、古舘王士の二人が内閣府の起業支援事業を活用し、独立しました。

現在は、それぞれ、地域コミュニティサロンを兼ねたイタリアンレストランの運営とキッチンカーを活用した物販を手がけています。

また、平成 25 年 3 月 31 日を持って、店長を務めていた岩間美和をはじめ、計 4 名の緊急雇用スタッフが独立し、現在は別経営体として、公金や募金等に依存しない経営をおこなっています。



### ④新規事業開拓チーム

平成 24 年（2012 年）の 8 月には、「大槌ひと育て×まち育て大学」というオープン参加型の学びの場を開校しました。

2011 年 10 月から 12 月の間、町民が主体となってまちづくりを考える「大槌町地域復興協議会」という会議が数回開かれる中で、生活に関わる重要な問題について議論する場であったため、感情的になるのは仕方がないが、参加者が、互いを尊重しつつ、大槌の未来について、創造的な対話を行うことができれば、もっと良い会議になったのではないか、という思いがありました。

そこで、商品開発やイベントの企画など、それぞれの身近なテーマを通して、対話などの作法が自然と身に付き、それが文化として醸成されていく取り組みとして、前述の大学を設立しました。昨年度は総勢 40 名の町民の方が在籍し、魅力的な講師による講義やワークショップ、視察研修などに参加し、ビジネスや事業について、また、今後の大槌のあり方などを基本から学びつつ、実践してもらいました。

また、現在、約 20 名の高校生達を対象に、「こども議会」という組織をつくり、大槌の復興のために必要なプロジェクトを、自分たちだけで、または大人の関与を得て、あるいは行政と協働により、生み出していく取り組みを行っています。

これら学びの場が出たアイデアやプロジェクトの種を、「夢会議」という世代と地域を超えた対話の場（フューチャーセンター）に持ち寄り、皆で磨き、形にしていくプロセスを経験してもらっています。



## II 第Ⅲ期事業年度事業について

### 1. ビジョン

成員達とワークショップをおこない、各個人の思いを踏まえたおらがのビジョンを定めました。  
以下、ビジョンの全文です。

尊い命、美しいまち、高度な科学技術への信頼・・・

2011年3月11日、

私たちの<sup>ほし</sup>地球は多くのものを失いました。

それと同時に、

悲しみ・絶望・暗闇の淵から、力強く立ち上がる人も、多く現れました。

当初より、そのような人たちを突き動かしたのは、郷土愛や使命感など、「他から規定される感情」だったかもしれません。

しかし、そればかりでは、この先も続く困難を切り開いていくことは難しいと、私たちは考えました。

だからこそ、

**全ての「私」が、未来に向けた希望や夢を「見つけ」、ともに「育て」、「輝かせる」場所でありたい**

私たちの団体名である“おらが大槌夢広場”には、そんな意味が込められています。

「おらが」が世界中の人にとっての一人称になるように、この大槌町から、夢の環を広げていきたいと思えます。

## 2. 取り組みの方向性について

### (1) 課題意識の整理

#### ① 平時のまちづくりと復興まちづくりでの担い手の差異

震災後に生まれた新しいまちづくり担い手の活動のきっかけを紐解くと、震災によって失業を余儀なくされたため、故人の想いを実現するため、といった、外発的な要因に基づくものも多い。このような平時とは異なる動機付けを途切れさせることなく、継続的なものに繋げるためには、サポート体制のあり方にも明確な違いが希求されます。

今までに構築されてきた知見によるサポートと、個別の案件に対するコミットメントの高さが必要となります。

#### ② 身の丈を超えた復興まちづくり

上記にも関連するが、復興段階において構築されたまちづくりの戦略や手法が、現地の身の丈に合わないものである事例も見受けられます。これは、平時の資金調達手段やまちづくりの実施体制と、有事とのギャップがあまりにも大きすぎ、被災地側がインプットを巧く消化出来ないためだと考えられます。

まちの成長ステージや地域特性、その他、被災地特有の事情を熟考した上で、ハンズオン型の活動サポートが必要です。

#### ③ 成功モデルの模倣と安易な差別化

震災後のまちづくりに係る計画には、成功モデルを模倣・輕易に改変したのものも散見されます。プランニング策定段階では総花的な提案への承認が得られやすい反面、将来の持続的なまちのあり方を見据えた場合、周辺地域との「過当競争」などの問題が懸念されます。

これを打開するためには、地域固有の資源やビジョンに裏打ちされた精神により、革新しつづけていく地域まちづくりの体制を構築することが重要です。

#### ④ 必要な負担への抵抗感

③で述べたことと相反する部分もありますが、今の被災地は特定課題（人口流出の抑止と基幹産業の再生等）の解決と、その前提となるインフラの整備に、時間も資金も人材も集中させる傾向にあります。この結果、短期的なまちの維持存続ばかりに固執し、事業を継続・成長させていく上で欠かせない部分への負担を惜しむことが多く、これらの負担の重要性を、地域が正しく認識することと、その機会づくりが大切です。

### (2) おらがの役割

#### ① 被災地の現場に立脚した人材の活躍の場を確保する

地域の価値を最大限に高めるべく、被災者と共に汗をかいた経験は他では代え難いものです。そこで、震災後、現場に立脚し、膨大なナレッジとコネクションを有する人材を、団体の垣根を越えて登用する機会を造り出し、マルチステークホルダーで経験の交換を図る場を創出します。

#### ② 地域での位置づけや事情に配慮した、「おらがまちづくり」のサポートを行うこと

地域の中でまちづくり活動やソーシャルビジネスの立ち上げなどをおこなう場合、担い手の想

いが地域内に浸透し、皆が応援したくなるという気運の高まりが非常に重要です。

そこで、「お金にならない役割（自治会・消防団など）」に従事する事が当たり前な岩手県民の特性を踏まえ、募集の段階から、ソーシャル・キャピタル（応援団）を組成し、地域の承認を得られる仕組みづくりに力点を置いたプログラムを展開します。

③ 岩手県内の人的資源を最大限に活かすとともに、適宜、外部人材を投ずること

岩手県は地理的な特性等から、予てより良質な地域づくりやソーシャルビジネスが創発されています。県内での先達者や、震災後に被災地と強固な関係性が構築された外部人材を活用するプラットフォームづくりが重要です。

### （3）具体的なアクション

① 復興まちづくりを牽引する事業やプロジェクトの創出

今までの事業を継続するとともに、全体及び個別事業のプランニングや新しい企画の創発、資金調達、工程管理、事業化に注力し、3組の町民起業グループと4つの安定的な事業の創出に繋げた。事業化で大切なことは、志の高さと身の丈に合った商売であること、地域が応援する姿勢（ソーシャルキャピタル）を持っているか、ということを重視し、地域力を底上げ・牽引する「小商い」や事業の創出を行うための執行体制を維持します。

独立するスタッフ達は大槌の復興に欠かせない「エンジン」として、各事業を高度化していくべく、ハンズオンでのサポートをおこないます。

② 楽しみが作法を生み、作法が文化をつくる

ひと育て×まち育て大学の取り組みを通じ、内外の様々な特性を持った人々が一堂に会し、提案者に対してコーチングすることで、企画が熟度を増していくことが明らかとなりました。また、外部から住民とともに地域の課題解決に当たりたいと参加している方々の反応から、この学びの場自体も、前述した「ツーリズム事業」のコンテンツの一つとして十分活用出来るものであるため、これを高度化していきます。

③ 「協働」の文化がなかった町での役割

今年度は、今までの活動に加え、後述する二つのプロジェクトを通じ、行政と住民の協働の場づくりに注力していきます。

事業やプロジェクトを一緒に運営することで、信頼関係を作り出すことで、ネガティブな意識を払拭し、復興まちづくりが進展する一助になると考えています。

一つ目は住民組織・大槌町総合政策部の協働事業として実施する「ひよっこりひょうたん塾」の運営である。大槌湾に浮かぶ「蓬莱島」は人形劇「ひよっこりひょうたん島」の舞台であるひょうたん島と似た形をしており、予てより、ひょうたん島のモデルであるといわれていました。この地域に欠かせない資源を活用し、人形劇のストーリーに準えた講座を開催、一般市民の生業やまちづくり参加スキルの向上などに繋げるとともに、「プランナー」「プロモーター」「ファシリテーター」など、専門的なスキルを有する人材の育成に取り組んでいます。この専門的人材を、復興交付金事業における効果促進事業の企画提案及び実施の担い手として登用することを行政とともに進めています。

二つ目は、大槌町産業振興部と教育委員会とともに、大槌町復興交流ツーリズム運営協議会を設立し、地域資源の発掘とツーリズムへの活用を検討するとともに、復興支援ブーム後の地域の観光のあり方の検討と、観光協会を代替するセクターの新設検討を担当しています。

大槌町での上記のような取り組みを通じて得た知見は、他の被災地等でも援用できるものであるため、筆者は現在、複数の地域から要請され、プロジェクト等の運営に際してのアドバイザーをおこなっています。